

「農村におけるコミュニティ形成 ―福島県中島村を例に挙げて―」

R. O.

1：現代の社会問題と縦横のつながりの重要性

近年、少子高齢化や都市部への人口流出などが理由で農村部における人口減少は著しく、社会問題となっている。このような社会問題は農村部だけにみられることではないが、特にこの問題は農村部や小さな集落では直接的かつ大きな影響を受けているだろう。私は、過疎化や少子高齢化が進む農村部においては特に、「地域コミュニティ」の存在が重要ではないかと考える。地域コミュニティの存在は地域のつながりやご近所づきあいを加速させるだけではなく、その地域の伝統文化の存続や産業の発展にもつながる。

私自身、今の生活の中にコミュニティを感じることは少なく感じている。正直今私が住んでいる家の近所にどのような人がどのように暮らしているのか知らない。すれ違ったご近所さんとあいさつ程度は交わすものの、それ以上の交流はない。それは特に都市部にみられることなのかもしれないが、とても寂しく感じる。話は変わるが、私は旅が趣味であり、休みがあるとよく日本各地のいろんな場所へ出向くのだが、各地で出会う人々がとても温かく優しいなと感じるような経験が多い。特にそれは都市部ではない農村部や、過疎地域を訪れたときに多く感じる。もしかしたらこのような農村部には未だに根強く地域の繋がりが残っているのかもしれない。初めて会った私のことを、まるで家族同然のように自然に話しかけてきてくれる。そのような横の繋がりが現代社会において希薄になっていることは明らかであろう。ここでいう横の繋がりとはいわゆるご近所づきあいである。では縦の繋がりとはいか。それは家族間での繋がりである。近年、家族間の繋がりも乏しくなっているのではないかと感じる。このような縦横の繋がりはどちらも、現在の日本社会において最も取り戻さなくてはならない大切なものの一つなのでないだろうか。

今回私は、福島県中島村を例に、農村におけるコミュニティ形成について研究しようと思う。その理由として、中島村は福島県内では年少人口率がトップである村であり、少子高齢化が進む現代日本にとってこのような農村はまれであると感じ、少し特殊な存在である中島村ではどのようなコミュニティ形成が行われているのかを考察してみたいと思ったからである。そこでまず、次節で地域コミュニティとはなにか、地域コミュニティの果たす役割は何かを整理することから始めようと思う。

2：地域コミュニティとその役割

地域コミュニティというと、広義では地元の町内会、自治会、農村の寄り合い等地縁的つながりのある様々な組織や集まりといった地域共同体である。広辞苑では「コミュニティ」とは、「一定の地域に居住し、共属感情を持つ人々の集団。地域社会。共同体」と定義されている。他方、総務省では、「(生活地域、特定の目標、特定の趣味など) 何らかの共通の属性及び仲間意識を持ち、相互にコミュニケーションを行っているような集団 (人々や団体)」と定義しており、「地域コミュニティ」を「共通の生活地域 (通学地域、勤務地域を含む) の集団」としてい

る（山内、2009）¹。簡単にまとめれば「小さな集落」や「ご近所づきあい」と訳すのがわかりやすいだろうか。

次にコミュニティの役割とは何かについて述べる。我々が日常生活を営む上での最小の社会的単位が個人・家族である。これはあくまで私的なものであり、これに対極にあるものとして政府や自治体といった公的な主体がある（山内、2009）。

地域コミュニティが果たす役割には様々なものが挙げられる。例えば、町内会や自治体を通して、そのコミュニティの方針や方向を決定する機能（弱行政的な機能）、それらを通じたお祭りや伝統行事などの開催（地域文化の維持）、まちづくりや防災活動などの役割、また、老若男女、子供も大人も交流することが出来る世代間交流の場としての機能などが挙げられる。これらすべてに共通することとして、地域住民の主体的なコミュニティへの参加が必須だろう。中心一周辺という構造による、上からの圧力によって下の者が動くという形式ではなく、住民がより主体的、積極的に自らのコミュニティ運営に参加することが大切であると考えられる。

3：福島県西白河郡中島村概要

今回、調査対象地としての福島県西白河郡中島村についてここで簡潔に紹介する。福島県西白河郡中島村は福島県中通りに位置する、人口 5221 人²（2015 年 6 月 1 日現在）、世帯数は 1584 世帯³の小さな村である。村の南部には阿武隈川が流れ、四季折々で様々な景観を見せる自然豊かな村だ。村の基幹産業は農業であり、当村では産業の六次化、後継者の育成や集落営農事業の支援などを積極的に行っており、農業の振興を目指している。本村を今回の対象とした理由の大きな一つとして、中島村の年少人口率の高さという点にある。当村は年少人口率（15 歳未満人口）が 14.7%（2012 年現在）⁴となっており、その比率は福島県内でトップとなっている。先にも述べたとおり、現代日本において少子高齢化、また若者の都市部への流出などの問題が挙げられているのにもかかわらず、当村のような極めて小さな村で年少人口が多いという点はなかなか興味深く感じられる。数値的には年々減少がみられる年少人口率であるが、それでも県内トップを走り続けるのに何か理由があるはずである。次節では中島村において行われているコミュニティ形成事業について紹介したいと思う。

4：福島県中島村におけるコミュニティ形成事業

ここではまず、中島村において現在行われている、コミュニティ形成事業について紹介していく。なお、これらの事業については中島村の村勢要覧 2013⁵を参考に、箇条書き形式で私なりにまとめたものを記述する。

¹山内一宏（2009）「少子高齢化時代におけるコミュニティの役割 ～地域コミュニティの再生～」

²福島県中島村 HP <http://www.vill-nakajima.jp/forms/top/top.aspx>（2015 年 6 月 14 日閲覧）

³都道府県・市区町村別統計表（国勢調査）
http://e-stat.go.jp/SG1/estat/GL08020103.do?_toGL08020103_&tclassID=000001037709&cycleCode=0&requestSender=search（2015 年 6 月 14 日閲覧）

⁴中島村・村勢要覧 2013 参考

⁵福島県中島村村政要覧 2013 参考

http://www.vill-nakajima.jp/forms/info/info.aspx?info_id=32389

① 保育ボランティア「うさこちゃん」

保育士を定年退職された方たちの発案で平成 16 年に結成された子育て支援の団体。団体の方によると「保育園や幼稚園に入る前の親子は結構孤独。まして近所に同年代の子供がいなければなおさら。こうした行き場のない親子を支援する場があったらいいのに、登録や予約なしで自由に立ち寄れて子供同士が遊んだり、お母さん同士が情報交換したり、などそのような思いで月一回の子育て広場を運営しています。」という。村内在住の 0~3 歳くらいまでの親子を対象に毎月第 2 火曜日に保健センターを会場に開催している。

② 中島村赤十字奉仕団

1990（平成 2）年結成。助け合いと奉仕の精神で災害時の炊き出しから、日常的な奉仕活動を行うボランティア団体。2011 年の東日本大震災では、福島県中島村は震度 6 弱を記録。家屋や公共施設などは大きな被害を受け、また同時に発生した福島第一原発事故の風評被害で、本村の基幹産業である農業についても深刻な影響を及ぼしている。当団体は震災時に浜通りから非難した被災者 100 人分の炊き出しを 1 週間にわたって行う。

③ ふるさと中島・川原田を想う会

平成 24 年に県の「地域づくり総合支援事業」の助成を受けて発足したのが当事業。当団体関係者によると、「來迎寺の境内で行われていた盆踊りが震災の前に途絶えてしまった。夏の楽しみで、地域の絆をはぐくむ大切な伝統行事である盆踊りをとだえさせてはならない。有志を集め、笑顔の絶えない元気で住みよい川原田にしていこう」という。これまでは盆踊りの復活、寺子屋教室、狛犬ツアーなど地域の人々が参加できるイベントを企画し、地域の絆づくりや伝統行事の復活などに貢献してきている。

ほかにもたくさんコミュニティ形成事業があったのだが、今回はこの三つを例として挙げる。まず①の保育ボランティアについてだが、この事業は中島村の特徴である年少人口率の高さの一つの理由であると考えられる。現代社会が抱える問題の一つに保育士不足があるが、それを定年退職した保育士が補うことでそのリスクをうまく回避しているように見える。幼児を抱えた母親にとっては、母親同士がつながることで、それぞれの育児に関する情報交換や、交流の場としての役割を果たすことが出来る。また、定年退職した保育士ボランティアにとっては、育児の先輩としてアドバイスすることもできるし、仕事を引退し、外に出ることの少なくなりがちな高齢者と、若い世代の世代間交流の場としても活かすことが出来るのではないかと考えられる。②、③についてはともに 2011 年に発生した東日本大震災による影響が見られる。中島村の位置する福島県中通り地方では震度 6 弱を記録し、家屋への被害も多くみられた。また県内の福島第一原発事故による避難者に対しては炊き出し事業等も行ったという。震災を機に開催されなくなってしまった地域の盆踊り大会についても、伝統を途絶えさせてはいけないという、地域住民主体で立ち上がったことにより、地域コミュニティの再生・復興に力を注いでいる。これらの事例は震災を機に、よりコミュニティを強めることが出来た明るい事例であるように見える。

中島村では村政的にもコミュニティ事業の促進を図っており、なかじまむらづくり支援事業補助金交付要綱第一条には「この要綱は、村民と行政が協働のむらづくりを目指し、魅力ある地域社会の実現を図るため、村内で活動する団体等が、新たなコミュニティづくりや活力ある地域づくり活動に要する経費について、当該団体に対し、予算の範囲内においてなかじまむら

づくり支援事業補助金を交付するものとする⁶⁾とある。行政的にもコミュニティ促進を進めており、より事業が展開しやすい環境が整っていることがわかった。

5：中島村訪問でわかったこと

今回私は、実際に中島村を訪れ、村の雰囲気を実際に自らの肌で感じてくることが出来た。行政の方へのインタビュー等は都合が合わずできなかったのだが、ややエッセイ調にそのレポートをしたいと思う。

2015年6月12日、私は宇都宮から東北本線に乗り、中島村から近い矢吹駅で下車した。中島村にはJR線、私鉄線ともに通っていないため、隣町の矢吹町にある矢吹駅から徒歩でアクセスすることにした。当日は雨も降っており足元は悪かったのだが、街の雰囲気を味わうには徒歩が最適であると感じた。中島村までは矢吹駅から約5キロの道のりであったが、県道44号線を南下しているときには乗用車よりも工業用のトラックやダンプが多い印象であった。

私は一つ今回のフィールドワークで目的を持っていた。それは、コミュニティ形成において重要な要素の一つとして、銭湯や温泉などの入浴施設が挙げられるのではないかという点を考えていた。憩いの場として老若男女が訪れる入浴施設は、いつでも誰でも利用することが出来、またその場における交流も存在するのではないかと思った。中島村の入浴施設は一つのみしかなかったため、中島村唯一の入浴施設である「ふれあいの郷」を訪問した。入館料は大人400円ととても手軽である。中には一つの湯船と小さなサウナがあるのみの小さな施設であった。そこであるおじいさんとお話することが出来た。彼は76歳の男性で、隣町から一週間に一度程度で訪れているという。顔見知りがいれば一緒にくだらない冗談を言い合ったり、社会について批判したりと、充実した入浴生活(?)を行っていた。震災以降、中島村および周辺に存在した入浴施設が相次いで閉館、又は値上げ等を行い、手軽に来られる入浴施設はここ「ふれあいの郷」のみとなってしまった。私のような若者は珍しいと言ってたくさんお話をしてくれたのを覚えている。彼はこのような温泉施設でほかの人と他愛もない話をするのが楽しいと言っていた。人との触れ合いは死ぬまで絶やしたくないと言っていたのが印象的だった。ほかにもご老人の方が入浴中に話しかけてくれることが多く、いろんな意味で気持ちの良い入浴であった。

入浴後は村役場を訪れたり、中心地にある童里夢公園なかじま等を訪れたりしたのだが、先にも述べたとおりあいにくの天気であったのと訪れた日が平日であったことなどから人気は少なく、閑散とした印象であった。帰りは中島から西方面へ向かい、泉崎駅まで約5キロの徒歩の旅をした。1時間に二本程度しかない上り列車に乗り込み、和やかな気持ちで宇都宮へと帰った。

6：コミュニティの存在が果たす未来

地域コミュニティの存在は実際重要であることは変わらない。コミュニティがないよりもあったほうがいいことは一目瞭然である。今回私はコミュニティの重要性について5W1Hを用いてまとめたいと思う。

⁶⁾ なかじまむらづくり支援事業補助金交付要綱（平成26年）より引用

第一に **What** : 良いコミュニティとは何か。第一節でも述べた通り、縦と横のつながりを強く持つことのできるコミュニティが良きコミュニティであると考え。伝統文化やお祭りなどの伝統行事、町内会などを通したご近所づきあいを通して、横のつながりを構築し、またそれらを継承していくことで縦(家族)のつながりの希薄化を止めることが必要ではないだろうか。

第二に **Why** : なぜコミュニティが必要なのか。例えばコミュニティの存在が人の死を防ぐこともできる。重要な社会問題である孤独死はコミュニティの構築で防ぐことのできるのではないかと考える。それは必ずしも高齢化が顕著に進む農村部だけでなく、たとえばマンションで一人暮らしを営んでいるような都市部の高齢者にも当てはめることができる。地域コミュニティや憩いの場の存在が、その人の暮らしのクオリティを向上させ、また隣人の安否確認の場として意味を成すのではないかと考える。

第三に **When** : コミュニティを構築するのに早すぎることはない、ということである。一般的に災害とコミュニティというのは強く結びつくといわれているが、災害大国である日本にとっていつ大災害が発生するかは誰にもわからない。それは今回例として挙げた中島村のように、震災や今後起こりうる災害に対して、コミュニティの存在は復興へ向けた大きな一つの糸口となりうる。災害に備えるために周りとのつながりや、避難場所などの確認、災害が起きた場合のあらゆることをそのコミュニティ内で確認・把握しておくことでその被害を最小限に抑えることができるのではないかと考える。

第四に **Where** : ノスタルジックを感じるようなコミュニティを全国に、という点である。現代社会では都市部におけるコミュニティは希薄化され、もはや隣人の顔も名前も知らないという事態も少なくない。かつて、昭和や大正時代などにみられたようなご近所づきあいを是非とも都市部で復興してほしい。私の主観的な考えであるが、映画やTV等でみる昭和時代等に見られた繋がり温かさがうらやましく感じている。私自身平成しか生きてことがないが、あの懐かしい感覚は、人々の心を温かくし、温和で柔らかなコミュニティを生むのではないかと感じる。

第五に **Who** : 老若男女すべての世代を繋ぐコミュニティを、という視点で見たい。世代ごとが繋がる空間はあっても、世代間をつなぐコミュニティ空間はあまり存在しないように思われる。そのため、より多くの世代が繋がることのできるコミュニティの構築が必要ではないだろうか。それは例えば地域のお祭りや地区単位での運動会などでもなんでもよい。老若男女すべての世代が交流する場を設けることで、より強固なコミュニティが築けるだろう。

最後に **How** : どのようにコミュニティを構築していけばいいのか。コミュニティを作っていくのは住民自身であると私は考えている。より自発的に、住民たちが動き出すことでそのコミュニティは形成されていく。出会う人とあいさつをすることや、地域のイベントに参加することなど、自分自身が地域コミュニティの一員であり主体であるという意識を持つことがコミュニティ構築の第一歩であることなのではないだろうか。

これらのように六つの方法を述べてみたが、今後も加速するであろう日本の少子高齢化、地方の過疎化、人口流出については常に考えていかなければいけない問題であろう。今回例に挙げた中島村のような老若男女、すべての世代が住みやすい村であるような制度や環境を整えば、都市部への人口集中は緩くなり、村のような小さなコミュニティでも住みよく、充実した生活を営むことが出来るようになるのではないだろうか。